

抗 GAD 抗体が発症10ヶ月で陰性化した 高齢緩徐進行 1 型糖尿病の 1 例

わ だ まさ ゆき¹⁾ にし き まさ てる²⁾
和 田 昌 幸¹⁾ 西 木 正 照²⁾

キーワード：緩徐進行 1 型糖尿病，抗 GAD 抗体，インスリン治療

要 旨

症例は72歳，男性。平成17年1月頃から口渇が出現し当院を受診した。受診時 FBS 309 mg/dl HbA1c 10.3%と高血糖を認め，精査加療目的で入院した。肥満歴および糖尿病の家族歴がなく，抗 GAD 抗体価 12.1 U/ml と陽性を認めたため，高齢緩徐進行 1 型糖尿病と診断した。少量頻回インスリン治療（合計22単位）を開始し血糖値の改善を認めた。インスリン導入後，抗 GAD 抗体価は低下し，約10ヶ月で陰性化した。この経過中，HbA1c 6.5%前後で血糖コントロールは良好に保たれ，内因性インスリン分泌能は保持されていた。以上，少量頻回のインスリン治療が，その病態改善に有効であると判断された高齢緩徐進行 1 型糖尿病の 1 例を報告した。

はじめに

糖尿病発症時 2 型糖尿病の約 5 %に，抗 GAD 抗体陽性を認め，進行性にインスリン依存状態に至る症例が存在することが知られている。これらの病態は現在抗 GAD 抗体陽性 2 型糖尿病，緩徐進行 1 型糖尿病（以下 SPIDDM），Latent Autoimmune Diabetes in Adults (LADA) などと呼ばれている¹⁾。SPIDDM は発症当初，内因性インスリン分泌能が保持されているが，徐々

に内因性インスリン分泌能が枯渇してくること，家族歴や肥満歴がないこと，さらに抗 GAD 抗体などの自己抗体陽性が 2 型糖尿病と区別される診断根拠となる。一般に抗 GAD 抗体は年単位で徐々に抗体価が低下してくることが知られているが，今回 1 年未満の早期に抗 GAD 抗体が陰性化し，内因性インスリン分泌能が発症後も保持されている高齢者 SPIDDM の 1 例を経験したので，文献学的考察を加えて報告する。

症 例

患者：72歳，男性

主訴：口渇

現病歴：2005年1月4日ごろより，特に誘因なく

Masayuki WADA et al.

1) 町立奥出雲病院

2) 島根大学医学部内科学第一（現ベリタス病院）

連絡先：〒699-1551 仁多郡奥出雲町三成1622-1